

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：35405

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22530779

研究課題名(和文) 青年期女子の注意欠陥多動性障害(ADHD)への臨床心理学的アプローチ

研究課題名(英文) A clinical psychological approach to female college students with ADHD(Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder)

研究代表者

山下 京子(YAMASHITA, Kyoko)

広島女学院大学・文学部・教授

研究者番号：30330666

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：青年期女子の注意欠陥多動性障害(ADHD)に焦点を当て、大学生ADHDの特性を明らかにし、大学における支援のあり方を検討した。大学生ADHDの特性として、注意、抑うつ、動機づけの問題を挙げることができた。臨床場面において、診断を持っている学生がまだ少数であることと、グレーゾーンの学生が多いことから、大学における支援は、ADHDの特性を持つ学生を対象にした個別のアプローチと、一般学生を対象とした全般的なアプローチの、双方向が必要であると明らかになった。

研究成果の概要(英文)：I focused female college students with ADHD(Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder), and showed the traits of ADHD and discussed the support for them in a university. College students with ADHD have some problems, for example, in attention, depression, and motivation. In my case study, a few students have a diagnosis of ADHD and many are ADHD suspected. So the ideal support for college students with ADHD requires two approaches. One is a personal support for ADHD students and another is a general support for all students in a university.

研究分野：臨床心理学

キーワード：注意欠陥多動性障害(ADHD) 発達障害 大学生女子 修学支援

1. 研究開始当初の背景

(1) 特別支援教育が、2007年度より全国で完全実施となった。学校現場において、発達障害に対する関心は高まっているが、その支援プログラムは充分に開発されているとは言えず、教師の経験によるところが大きい。実際、公立小・中学校のスクールカウンセラー(以下 SC と略)として心理臨床活動を実践する中で、特に小学校教職員へのコンサルテーションで、注意欠陥多動性障害(ADHD)を中心に発達障害が話題となり、その対応に苦慮している教職員が少なくないと感じている。山下(2007)は SC としてかかわった事例を整理して、小中学校における発達障害のある児童生徒に対する支援のあり方について考察を加えた。発達障害に対する適切で正しい理解と対応は、支援の第1歩であると考えられるが、発達障害の中でも ADHD に関しては、いまだに不明瞭な部分が多くあり、研究途上にあると言える。

(2) ADHD に関して、様々な分野からのアプローチが試みられている。例えば、分子遺伝学研究において、遺伝的アプローチから ADHD に関連する遺伝子を探る研究が精力的に行われ、その結果、カテコールアミン系とセロトニン系の ADHD への強い関与が確認されている。Kenneth ら(2008)によると、分子遺伝学の研究は、ADHD に感受性を媒介する遺伝子をいくつか同定しており、文献上の合意は、「脳報酬カスケード」における機能不全、特にドーパミン系において、低いまたは逆行ドーパミン作用性傾向を引き起こす時に、脳が不快な感情を避けるために個人にドーパミンを要求するというものである。このハイリスク遺伝特性は多様な薬物探索行動へと導かれると考えられている。ドーパミン遺伝子や他の「報酬遺伝子」の遺伝的異型が、報酬欠損症候群(RDS)の重要な共通の決定因であると提案されており、Kenneth らは、その行動のサブタイプとして ADHD を含むと仮定している。Kenneth らの仮定に則れば、RDS のサブタイプである ADHD は、成人においては薬物乱用等の外在化問題行動の可能性が高くなると考えられ、ADHD の早期診断だけでなく、成人 ADHD の治療も積極的に行う必要があると考えられる。

(3) ADHD の病態の解明が進む中、成人 ADHD に対する関心も高まり、その障害ゆえに現実的に困難な問題に直面していること、しばしばうつ病などの併存疾患を持っていることも取り上げられるようになってきた。青年期以降の ADHD については、成人 966 名対象で罹患率 2.9%(Faraone & Biederman, 2005)、18 歳から 44 歳まで 9200 名対象で罹患率 4.4%(Kessler, Adler, & Barkley, 2006)と報告されている。臨床場面では、女子大学生を対象とした学生相談活動の実践において、不注意が目立ったり、時間管理が不得意な

ために、不利益を被る学生に出会うことが多い。こうした学生の中に、成人 ADHD の基準に合致するものがあると予想される。ADHD のなかでも不注意優勢型は、女子に多く、学童期に目立ったトラブルがない場合もあり、そのまま本人の自覚もないままに大学進学しているケースがあると言われている。学生本人の自己管理によるところが多いと思われる修学や就労で支援が必要である。

2. 研究の目的

(1) 大学生女子を対象とした青年期 ADHD の実態把握をするために、適切なスクリーニング方法を検討する。

(2) 大学生 ADHD と、学童期の ADHD の発達プロセスを比較検討し、大学生 ADHD の特徴を明らかにする。

(3) 大学生 ADHD の対人関係のスキルに焦点を当て、ピアの観点を取り入れた、効果的なピア・サポートのあり方を提案する。

(4) 青年期・成人期 ADHD を対象とした研究を中心に、大学生 ADHD の特性を検討する。

(5) 大学における ADHD 学生の支援の有効なあり方について、モデルを提案する。

3. 研究の方法

(1) 青年期 ADHD と成人 ADHD に関する先行研究を概観、比較することで、青年期 ADHD の特徴を抽出する。

(2) 小児期から成人期まで、ADHD の症状の変遷について、小学校・中学校での SC としての臨床事例と、大学学生相談室における相談事例を比較し、大学生女子の ADHD の概要を把握する。

(3) 大学におけるピア・サポート活動の実践例をもとに、大学生 ADHD の対人関係のスキル向上に効果的なピア・サポート活動のあり方を検討する。

(4) 文献研究や、事例研究、実践事例をもとに、大学における ADHD 学生の支援のあり方を提案する。

4. 研究成果

(1) 大学生の ADHD の支援に有効な方法を検討することを目的とし、青年期以降の ADHD 研究の概観を行った。児童期の ADHD が、青年期、成人期へと継続する要因として、児童期に混合型であることや、併存症の存在、親の精神障害(Lara ら, 2009)が挙げられている。ADHD 女子を対象とした縦断的研究(Biederman ら, 2010)においても、精神疾患にかかる危険性が高いことが示されている。ADHD にとって、併存疾患の有無は障害の程度とも関係する重要な指標であると考えられるが、Wilens ら(2009)は、成人 ADHD の下位タイプや性差により、併存症が異なることを報告している。Wilens らによると、成人 ADHD の主症状は不注意であり、混合型が最も多く、併存症の割合も高くなっていた。

成人 ADHD の機能障害の特徴について、

Bridgett & Walker(2006) は、ある特性を持つ ADHD 成人がより大きな知的困難を体験していることから、併存する精神疾患を持つ ADHD 成人では、全 IQ スコアが減少するのではないかと推論している。また、Feifel ら(2009) は、ADHD の中心となる特徴が注意障害であることから、感覚運動情報制御機能を反映する指標の一つであるプレパルス抑制(PPI)を研究しているが、統制群との差は見いだされなかった。Boonstra ら(2010) は、ADHD 成人と健康な成人の実行機能を比較し、抑制領域で差が見られたことから、ADHD を注意や多動性の障害よりも自己制御の障害としてとらえている。

Norvilitis ら(2010) は、大学生を対象とした研究において、ADHD 症状のうち、不注意と大学適応への困難が関連していることを明らかにした。ADHD 学生に対する支援が進んでいる海外と比較し、我が国では、ADHD 学生の実態も明確ではなく、小山・玉村(2009)による関西地方の 53 大学を対象にした発達障害学生の支援の状況に関する調査では、自閉症スペクトラム障害(ASD)に比べると、ADHD 学生は、少数であった。ADHD 学生へのアプローチとして、まず、ADHD スクリーニングの実施が必要であり、成人用ではあるが、簡易に集団実施できる利点があることから、6項目からなる ADHD に関する自己報告式スクリーニング WHO ASRS(Adult ADHD Self-Report Scale)が適切であると考えられる。また、QOL(Quality of Life)の視点から、学生生活を調査することも、ADHD 学生の適切な支援のあり方を検討するために必要であるとわかった。

(2) 学童期の ADHD が、どのように青年期へと継続していくかを事例をもとに検討し、開始の時期により 3 タイプに分けた。小学校低学年児童で ADHD の診断をされるタイプ。性別は男児が多く、多動性、衝動性を問題としており、専門医療機関で ADHD と診断され、薬物療法を勧められるケースである。薬物治療が開始され、保護者と学校との連携がうまく取れている場合は、小学校時代の SC との関わりはほとんどなくなる。再び関わるのは、中学校入学後が多く、学業や進学の問題、対人関係の問題などで、担任教諭や親の面接希望があったり、子ども本人が SC との面接を希望する場合もある。一方、保護者の ADHD に対する理解が得にくく、学校との連携が取りにくい場合や、専門医療機関における継続的な治療が困難な場合、子どもを取り巻く環境自体が多くの困難を抱えている場合などでは、不登校や非行などの問題が生じやすい。小学校中学年以降で多動や衝動性が問題視されるタイプ。性別は男児が多く、専門医療機関で ADHD と診断され、薬物療法を受けながら、学校で個別学習支援などを利用して、学習を積み上げていくことになるが、家庭での学習習慣の形成や宿題の管理など、家庭の

協力が得られるかどうかには教育的効果は左右されるように思われた。中学生になって初めて相談機関を訪れるタイプ。中学校では、小学校に比べ、自己管理や時間管理を要求される場面が格段に増えることから、自己統制に問題を持つ場合、学校生活への適応を困難にすることにつながると考えられる。

これら 3 タイプの性別は男児が多いが、大学生女子の ADHD については、乳幼児期や学童期から問題となるようなケースとは異なった発達プロセスを辿るのではないかと推測される。すなわち、大学学生相談において、ADHD の診断を持っている学生に出会うことは、まだごく稀であり、ADHD の疑いのあるケースでは、多動や衝動性よりも、むしろ不注意で問題となることが多いからである。Dupaul ら(2009) は、ADHD 大学生に関する先行研究をもとに、ADHD の罹患率を大学生の約 2~8%であり、ADHD 大学生がより高い認知能力を持ち、過去の学業成功体験や、コーピングスキルを持っているにもかかわらず、学業上の困難さを抱えていると報告している。この学業上の困難さは、不注意や時間管理のまずさと関連しているという。Blase ら(2009) は、大学生 ADHD と大学適応の関連を検討し、一般学生よりも苦悩しながらも重大な適応困難には陥っていないことを示した。以上のことから、大学生の ADHD は、早期に ADHD の診断を受け、学童期から青年期へと継続するタイプとは異なり、幼少期や学童期では、むしろ目立たず、何となく経過したものの、大学生となって適応で苦労しているというプロセスを提案できる。

(3) Chew ら(2009) は、ADHD 大学生が、ADHD を持つ他者と関わることで、ADHD に対するポジティブな態度を持つことを報告している。このことから、ADHD 学生が同じ障害を抱えている他者と交流することは、学生自身が自分の特性を理解し、肯定的に自己受容し、必要な支援を取捨選択できるセルフ・アドボカシー・スキルの習得につながると推察される。ある特性を持つ学生が同じような特性を持つ他者と交流することには、ピアの視点を取り入れられている。ADHD 学生の大学適応を促進するためには、学業面だけでなく対人関係面での支援も重要であり、対人関係における支援例として、学内におけるピア・サポート活動をあげることができる。

大学におけるピア・サポート活動は、支援学生と要支援学生に二分される体制で実施されることが多いが、どちらの立場も経験することが、社会性の発達には必要であると考えられる。そこで、山下(2004)による実践例にみられる課題を明らかにし、ADHD を含む、発達障害や、その特性を持つ学生を対象とした、ピア・サポート活動のあり方を検討した。山下による実践例の課題としては、第 1 に活動の目標を明確化し、具体的な内容と結びつける必要があること、第 2 に、全ての学生を

発達途上にある人とみなす視点を導入し、支援を受ける立場と支援する立場の両方を体験する場として、大学教育の一環として位置付けることであった。これらのことから、ピアの観点を取り入れた、ADHDを含む発達障害学生や、その特性を持つ学生の支援のあり方として、学内外のボランティア活動を活用することが有効ではないかと考えられた。ボランティア活動を取り上げた理由の一つは、期間限定の場合が多く、明確な目標と活動内容を持ったプログラムを提供しているからである。また、支援を必要とする人に対する最適な支援は、自分が支援を必要とする人であるというアイデンティティを形成するのではなく、自分も支援することができるという、より複合的なアイデンティティを形成することにあることから、ボランティア活動は適切であると考えられた。

(4) 青年期・成人 ADHD を中心とした先行研究をもとに、大学生 ADHD の特性を検討した。中村(2012)は、成人期 ADHD の疫学調査を実施し、有病率の推定値 2.09%(95%信頼区間 = 1.64 - 2.54)を算出している。ADHD は、他の疾患と比較してもかなり一般的な疾患であるということができ、自閉症スペクトラム障害と同様に、個性が障害かに明確に線引きされない、幅広いグレーゾーンを持っていると考えられる。ADHD と自閉症スペクトラム障害との鑑別については、Fujibayashiら(2010)や、今田・小松(2009)による児童を対象とした研究があり、鑑別には不注意症状に着目することが有効であり、ADHD 特有の注意機能の特徴が存在することが示されている。Kalanthoffら(2013)は、成人 ADHD を対象に情報処理の特徴として、全体処理が困難であること、不注意優勢型の成人 ADHD の全体処理の欠陥が覚醒を改良することで緩和されると報告した。

ADHD の特性として、実行機能障害だけでなく、報酬系機能の障害も挙げることができる。うつ病と報酬系に関する認知神経科学的検討を行った国里ら(2008)²⁴や、セロトニンが報酬予測の時間スケールパラメータを調節するという仮説を検証した田中(2009)²⁵の研究から、ADHD の報酬系機能の障害は、抑うつ、動機づけの低下や衝動性の亢進につながると考えられる。

これらのことから、大学生 ADHD においても、注意、抑うつ、動機づけの問題を挙げることができる。ADHD の診断を持っている大学生が少数であることと、グレーゾーンの学生が多いことから、大学における支援は、ADHD の特性を持つ学生を対象にしたアプローチと、学修に対する動機づけのように、一般学生を対象としたアプローチの、双方向性が必要であると考えられた。また、注意に関する基礎的研究や、関連する学問分野間における情報共有や連携が必要である。

(5) 学生相談の臨床場面で、ADHD の診断を持つ学生は非常に少なく、その一方で、学業不振や抑うつ症状、大学生活への不適応などを抱える学生の中に、ADHD の特性を持つ者が多いように思われる。中には、自閉症スペクトラム障害(ASD)の特性を併せ持つケースもある。ADHD や ASD などの発達障害のある学生に対する合理的配慮において、学生の抱える困難さと障害特性との関連を説明する必要があるだろう。学修上の困難さに焦点を当てるならば、学生個人の特性を理解し、それに応じた支援のあり方を検討するという方向性と、あらかじめいくつかの特性を想定し、その対応策を授業に盛り込むという、ユニバーサルデザインを取り入れた学修支援の方向性の二つがある。後者の支援例としては、山下(2014)²⁶が授業における情報保障を行っている。この支援例では、問題点として、学修に対する動機づけの低い場合に支援が有効でなかったことや、支援を受け入れるまでの心理的なプロセスに個人差があることが挙げられた。

ADHD の特性である、動機づけや自己調整、時間管理の問題は、報酬系の障害との関連が指摘されている。報酬系については、価値割引や時間割引の観点から研究が行われている。Chantilukeら(2014)²⁷は、ADHD、ASD、ADHD と ASD の併存、統制群の少年を対象に、時間割引課題実施中の脳機能を、fMRI を用いて比較し、時間割引は ADHD の報酬系の障害理解にとって鍵となると述べている。時間割引の脳内メカニズムの解明が進むことや、時間割引を変化させる要因の検討などが、ADHD の動機づけや時間管理の問題を明らかにし、その対応や支援のあり方を提案することにつながると思われる。

ADHD 学生の学修支援においては、情報保障の観点からの授業のユニバーサルデザインと、個人の抱える困難さに焦点化した個別支援の二方向からのアプローチが必要である。どちらにおいても、動機づけの問題や、支援を受け入れるまでの心理的プロセスの個人差への配慮など、支援の根底に、心理学的視点を取り入れることが重要であるとわかった。

(6) ADHD 学生へのアプローチとして、ADHD スクリーニングの実施が必要であり、6 項目からなる ADHD に関する自己報告式スクリーニング WHO ASRS(Adult ADHD Self-Report Scale)が適切であるという結果を参考にして、新入生のオリエンテーションの一環として、入学直後に新入生全員に実施する心理検査に、ASRS6 項目を加え、実施するように変更した。4 点以上が陽性となるが、ここ数年間の平均は、学生数 400 名弱のうち、4 点以上は 40 名前後(10~11%)、5 点以上は 11 名前後(3~4%)であった。また、入学時陽性であった学生のフォローアップを行ったところ、学生相談で問題となるようなケースはほ

とどなかつた。このことから、ADHD スクリーニングテストで陽性の学生は、ADHD 特性を自覚している学生であり、彼らは、何らかの代替手段を講じているために、大学不適応状態にはなりにくいと仮定できるのかもしれない。卒業後の社会適応については、今後の課題として残る。

ADHD 学生特有の発達プロセスについては、さらに事例研究の積み重ねが必要である。また、ADHD 学生の特性を明らかにするために、注意に関する基礎的な研究、時間割引実験など、一般学生との比較研究が必要であろう。なお、性差については本研究で明らかにされなかつた。学生支援の立場からは、ADHD 学生自身が困っていることに気付いていない場合もあると予想されることから、学生の置かれた環境を、教育的観点から見直すことも、今後の課題である。

<引用文献>

山下京子 2007 軽度発達障害の心理学的支援のあり方．広島女学院大学論集,57,29-44．

Kenneth,B.,Chen,A.L.-C.,Braverman,E.R.,Comings,D.E.,Chen,T.JH.,Arcuri,V.,Blum,S.H.,Downs,B.W.,Waite,R.L.,Notaro,A.,Lubar,J.,Williams,L.,Prihoda,T.,Palomo,T.and Oscar-Berman,M. 2008 Attention-deficit-hyperactivity disorder and reward deficiency syndrome.*Neuropsychiatric Disease and Treatment*,4,5, 893-917.

Faraone,S.V.and Biederman,J. 2005 What is the prevalence of adult ADHD?:Results of population screen of 966Adults.*Journal of Attention Disorders*,9,384-391.

Kessler,R.C.,Adler,L.and Barkley,R. 2006 The prevalence and correlates of adult ADHD in the United States:results from the National Comorbidity Survey Replication. *American Journal of Psychiatry*,163,716-723.

Lara,C.,Fayyad,J.,deGraaf,R.,Kessler,R.C.,Aguilar-Gaxiola,S.,Angermeyer,M.,Demyttenaere,K.,deGirolamo,G.,Haro,J.M.,Jin,R.,Karam,E.G.,Lepine,J.-P.,Mora,M.E.M.,Ormel,J.,Posada-Villa,J.and Sampson,N. 2009 Childhood predictors of adult ADHD:Results from the WHO World Mental Health(WHM) survey initiative.*Biol Psychiatry*,65,1,46-54.

Biederman,J.,Petty,C.R.,Monuteaux,M.C.,Fried,R.,Byrne,D.,Mirto,T.,Spencer,T.,Wilens,T.E.and Faraone,S.V.2010 Adult psychiatric outcomes of girls with attention deficit hyperactivity disorder: 11-year follow-up in a longitudinal case-control study.*The American Journal of Psychiatry*,167,4,409-417.

Wilens,T.E.,Biederman,J.,Faraone,S.

V.,Martelon,M.,Westerberg,D.and Spencer,T.J. 2009 Presenting ADHD symptoms,subtypes,and comorbid disorders in clinically referred adults with ADHD.*Journal Clinical Psychiatry*,70,11,1557-1562.

Bridgett,D.J.and Walker,M.E. 2006 Intellectual functioning in adult with ADHD:A meta-analytic examination of full scale IQ differences between adults with and without ADHD.*Psychological Assessment*,18,1,1-14.

Feifel,D.,Minassian,A.and Perry,W.2009 Prepulse inhibition of startle in adults with ADHD.*Journal of Psychiatric Research*,43,4,484-489.

Boonstra,A.M.,Kooij,J.J.S.,Oosterlaan,J.,Sergeant,J.A.and Buitelaar,J.K.2010 To act or not to act, that 's the problem:primarily inhibition difficulties in adult ADHD.*Neuropsychology*,24,2,209-221.

Norvilitis,J.M.,Sun,L. and Zhang,J. 2010 ADHD symptomatology and adjustment to college in China and the United States. *Journal of Learning Disabilities*,43,1, 86-94.

小山ありさ・玉村公二彦 2009 高等教育における発達障害学生の支援 関西5府県における「発達障害学生支援に関する調査」を中心として．奈良教育大学紀要,58,1(人文・社会),69-78．

Dupaul,G.J.,Weyandt,L.L.,O'Dell,S.M. and Varejao,M.2009 College students with ADHD current status and future directions. *Journal of Attention Disorders*,13,234-250.

Blase,S.L.,Gilbert,A.N.,Anastopoulos,A.D.,Costello,E.J.,Hoyle,R.H.,Swartzwelder,H.S. and Rabiner,D.L.2009 Self-Reported ADHD and adjustment in college cross-sectional and longitudinal findings.*Journal of Attention Disorders*,13,3,297-309.

Chew,B.L.,Jensen,S.A.and Rosen,L.A. 2009 College students' attitudes toward their ADHD peers.*Journal of Attention Disorders*,13,3,271-276.

山下京子 2004 大学におけるキャンパス・サポーター・システムの導入に関する実践的研究．学生相談研究,25,21-31．

中村和彦 2012 発達障害について分かってきたこと - 生物学的背景を中心に - ．発達障害年鑑,4,6-11．

Fujibayashi,H.,Kitayama,S.and Matsuo,M.2010 Score of inattention subscale of ADHD rating scale is significantly higher for AD/HD than PDD. *The Kobe Journal of the Medical Sciences*,56,1,E12-E17.

今田里佳・小松伸一 2009 集団式注意機能検査における ADHD および PDD の障害特徴

の検討．特殊教育学研究,47,2,91-101．

Kalanthoff,E.,Naparstek,S.and Henik, A.2013 Spatial processing in adults with Attention Deficit Hyperactivity Disorder. *Neuropsychology*,27,5,546-555.

②国里愛彦・山口陽弘・鈴木伸一 2008 うつ病において報酬系の機能は阻害されるか? - うつ病と報酬系に関する認知神経科学的検討 - .群馬大学教育学部紀要 人文社会科学編,57,219 - 234 .

②田中沙織 2009 遅延を伴う報酬予測の脳機構の解明 - 強化学習モデルに基づくfMRI データの解析 .システム/制御/情報,53,4,137 - 142 .

③山下京子(研究代表者) 2014 障がい者のための高等教育支援開発研究:平成 23~25 年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業研究成果報告書 . 広島女学院大学障がい学生高等教育支援研究所 .

④Chantiluke,K.,Christakou,A.,Murphy,C.M.,Giampietro,V.,Daly,E.M.,Ecker,C.,Brammer,M.,Murphy,D.G.,the MRC AIMS Consortium and Rubia,K.2014 Disorder-specific functional abnormalities during temporal discounting in youth with Attention Deficit Hyperactivity Disorder (ADHD),Autism and comorbid ADHD and Autism.*Psychiatry Research:Neuroimaging*,223,113-120.

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

山下京子 2015 発達障害のある学生の学修支援への臨床心理学的アプローチ . 広島女学院大学人間生活学部紀要,2,43 - 52 . (査読無)

山下京子 2014 大学生 ADHD への臨床心理学的アプローチに関する一考察 . 広島女学院大学人間生活学部紀要,創刊号,27 - 37 . (査読無)

山下京子 2012 ピア・サポート活動を通して見た発達障害とその傾向のある学生に対する支援のあり方 . 広島女学院大学論集,62,11 - 24 . (査読無)

山下京子 2011 大学生 ADHD へのアプローチに関する一考察 . 広島女学院大学論集,61,031 - 045 . (査読無)

山下京子 2010 成人 ADHD(注意欠陥/多動性障害)研究と ADHD 学生の支援 . 広島女学院大学論集,60,13 - 29 . (査読無)

[学会発表] (計 1 件)

山下京子 2012 大学におけるピア・サポート活動のあり方について 11 年間のキャンパス・サポーター活動を通して . 日本学生相談学会第 30 回大会,2012 年 5 月 20 日,北海道大学 (北海道) .

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

山下京子 (YAMASHITA, Kyoko)

広島女学院大学 文学部 教授

研究者番号 : 30330666